

## 大胆な性格

片野修

### 動物の大胆さ

動物には大胆な個体と臆病な個体がいる。この性格は、さまざまな個性のうちでも、もっとも広くみとめられるものである。その理由は、ほとんどの動物が捕食の脅威にさらされていることにある。捕食者に襲われないためには、隠れ家に籠っていればよいのだが、そのままと食物をとることができない。したがって、動物は大なり小なり、危険を冒しても採餌活動をしなければならないが、その場合に大胆な個体と臆病な個体が生じることになる。

大胆な個体は採餌活動において有利であり成長も速いが、捕食される確率は大きい。臆病な個体は生き残る確率は大きい、成長は遅く、飢え死にするかもしれない。大胆な個体は、活動量が多いだけでなく、隠れ家から遠い場所にも出かけるかもしれない。一方、臆病な個体は隠れ家の近くでだけ採餌することになる。このことから、大胆さは活動量だけでなく、活動範囲にも影響し、大胆な個体は、よく知らないエリアでも変わらずに活動することが多いだろう。

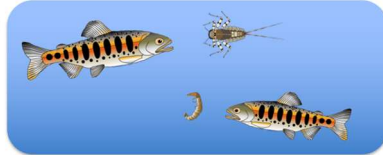


同じように見える魚にも個性がある。

私が動物の大胆さに気がついたのは、真夏にカワムツを観察しているときだった。小さな池で個体識別をしたうえでカワムツを追っていると、朝晩に採餌活動をしていたカワムツ

## 大胆な個体

- 1 隠れ場所から外にでる。
- 2 知らない場所にも行ってみる。
- 3 餌をとれるので、よく成長する。
- 4 捕食されやすい。



———経験を積むと食べられにくくなるかもしれない。

## 臆病な個体

- 隠れ場所の中にとどまる。
  - 知らない場所には行かない。
  - 餌をとれないので、成長できない。
  - 捕食されにくいですが、飢え死にしやすい。
- ———そのうち捕食者がいなくなれば、餌を食べられるかもしれない。



が、昼間になるにしたがって、隠れ場所に入って活動しなくなる。池に落ちる虫は朝晩に活発になるので、昼間には餌は乏しくなるのだろう。明るいと、カワムツを襲う鳥類に狙われやすくなるのかもしれない。その結果、数十尾活動していたカワムツが、しまいには1尾だけになったことがある。こうなると、そのカワムツは池全体を泳ぎ回って、何度も水面に落ちた虫を食べていた。その他のカワムツは、隠れ穴に潜んだままか、ときどき出てきて、その近くで藻をつつくと、すぐにまた穴の中に逃げ込むのであった。

大胆さは実験的に確かめることができる。かつてアユの個性について研究したときには、捕食者として脅威になるサギの頭のモデルを使ってみた。一尾ずつ水槽に収容したアユの頭上から、サギのモデルをふりかざすと、どのアユも水槽の底に静止して動かなくなった。このアユが再び動き出すまでの時間を計測すると、1~2060秒まで個体差があり、これが大

胆一臆病の指標になると考えた。

この原稿を書いている 2026 年の 3 月に、大阪市内に雄の若いシカがあらわれて話題になった。奈良公園から 30 km も離れた市街地にやってきたことから、縄張り争いに負けてきたのだろうと推測された。しかし、これまでそういう個体はいなかったのに、このシカが大胆であることはまちがいない。人が近づいても逃げず、人を襲うこともなく、おいしそうに雑草を食べている様子は、幸せそうだった。結局、捕獲されてしまったけれども、そのまま放っておけばよかったのではなかろうか。市街地にも雑草は多く、食べていけたらう。北海道では、市街地の空き地や公園にも、しばしばエゾシカが現れるが、だれも捕獲しようとは考えない。シカと共存する町があってもよいではないか。

さまざまな動物で大胆一臆病の個体差は報告されているので、この点についてはこれ以上、例示しない。ただ指摘しておきたいのは、同じ親から生まれた子の間でも、個性があることによって、その全滅を避けることができるということである。また、大胆な個体はそれまで利用されなかった場所でも活動することによって、資源をより有効に利用できるかもしれない。

## 文学における動物の大胆さ・・・小川未明の作品から

動物についての文学では、大胆な個体に焦点をあてたものが多い。同じところで同じように活動している個体は当たり前すぎて、描く価値がないのかもしれない。

小川未明の童話を読むと、まだ見たことのない遠くの土地にあこがれる話が多い。いまの生活よりも、はるかにすばらしい世界があるのだとしたら、そこへ行ってみたいと思うのは、動物でも人間でも、当然のことかもしれない。

『都会のからす』という作品では、都会で年をとったカラスが、貨車に魚が山積みされているのを見て、どこから来たのかと問う。その貨車が北の地方から来たことを知ると、そこへ行けば魚をいっぱい食べられると思って、連れて行ってもらう。ところが、北で獲れた魚は都会の金持ちに送られるだけで、北の土地では痩せたカラスがあふれていた。北の土地は理想郷ではなく、どこにいても貧しいものは食えない点は、人もカラスも同じだった。

『北海の波にさらわれた蛾』という作品では、白い蛾が森で発生する。丘の向こうで、りんごが花盛りという知らせがあり、一群の蛾はそちらへ向かうが、他の蛾は森に留まった。丘の向こうに行くと、りんごの故郷が北海の中の島にあることを聞き、蛾たちもそこをめざすが、強風にさらされて全滅してしまう。

『三匹のあり』では、お母さんに木の上の赤い葉にとまってはならない、と言われたけれども、5匹のうち3匹は守らずに乗ってしまう。風が吹いて、葉は河に落ち、ありの子たちは見知らぬ土地にたどり着く。そこでありたちは幸せになるが、自分たちの子には、赤い葉にとまってはならないと言った。

『公園の花と毒蛾』では、広くさびしい野原で咲いていた「とこなつの花」がもっとにぎ

やかな街の公園に行きたい、と鳥に頼んで、連れて行ってもらう。そこで、とこなつのはみつばちと友達になり、さまざまな人間や動物に出会うが、最後には珍しい花が咲いていると言われて、学者に引き抜かれてしまう。それでも、にぎやかなところで暮らし、多くのものを見ることができたので、とこなつのは幸せだったと言えよう。

これらの作品は、新しい土地に行き、うまくいくこともあれば、失敗することもあり、それを予知することはできないことを示している。ただし、動物が棲み慣れた土地を離れる理由はさまざまであり、大胆さだけによって決まるわけではない。サケマス類では、河川で成長が悪い個体から先に海に降りて生活する傾向がある。同じように、ある場所で捕食者が多かったり、食物が乏しかったり、ボスにいじめられたりして、どうしようもなくなって移動する動物は多い。それは、人間でも、その他の動物でも同様である。

ただし、人間の場合、異所に行くことは新しい経験をすることになり、そこで刺激を受けたり見聞を広めたりすることができる。行く必然性がないのに、誰も訪れたことのない山や極地、あるいは宇宙に行ってみたいと思う人は、大胆で冒険心に富むと言ってよいだろう。

## 大胆さと攻撃性

大胆さと攻撃性は別のパーソナリティと考えられることが多いが、大胆な個体が攻撃的な場合もある。一方で、臆病な個体は平和的で争いを好まないことが多いかもしれない。攻撃的な個体は、ふつう同種の個体と争うことが多くなり、行動学の教科書では「タカ派」と呼ばれることがある。タカ派はハト派を押しやけて優位に立つけれども、タカ派どうしは争って傷つきやすい。

巨大な帝国をつくった為政者は、大胆で攻撃的な場合が多い。領土を拡大し、占領したエリアの兵士をじぶんのものとすることによって、さらに強大な国をつくっていく。この過程では、臆病で平和的なリーダーは領土を失い、国を滅ぼされるだけである。一方で、強大な帝国は、さらに強大な帝国との戦争や、内部分裂によって崩壊することになる。織田信長は謀反によって滅び、豊臣家はカリスマであった秀吉の死後に分裂した。

闘争による人類の歴史では、為政者にとって弱者への思いやりは不要だった。反抗勢力は容赦なく死滅させなければ、いつ禍になるかわからない。いわゆるサイコパスという人格は、恐怖や不安、緊張を感じにくく、大胆で挑戦的である（中野 2016）。ナルシスティックで魅力的な面があり、お世辞がうまかったり、取り巻きのいたるが、他人の痛みを感じにくい。現在の大国のリーダーには、サイコパスが多いと言われている。

一方で、サイコパスには成功するタイプと失敗するタイプがあり、後者はただ粗野で乱暴で反感を招く無法者にすぎないということになる。成功するタイプは、その大胆さや無慈悲な側面を隠しつつ、野心に満ちていて、自己を抑制することができる。成功するサイコパスは私の知っている学者にもいれば、政治家や起業家にも多いと推測される。ただ穏便に生きようとするだけでは、社会的に大成功することはできない。

サイコパスには遺伝的影響がみとめられ、脳の構造とも関係することが明らかになっている（中野 2016）。同じように、大胆さや攻撃性も遺伝的影響をうけるが、その影響には多数の遺伝子と環境が関係しており、大胆さや攻撃性の遺伝子が1個あるわけではない（小出 2015）。大胆だけれども優しいこともあるだろうし、攻撃的だが理性的な場合もあるだろう。捕食者に襲われた経験があれば、いくらか臆病になるだろうし、強い個体を攻撃してひどい目に遭えば、その後は攻撃性を抑えることになるかもしれない。サイコパスにも、さまざまなタイプがあり、その性質が脳の構造や遺伝子とからめて研究されている。

## 新しい文化を生む個性

大胆な個体は、住み慣れたコミュニティを離れて移住しやすいと考えられる。これをコミュニティの側からみると、見知らぬ土地から見知らぬ個体がやってくることになる。いわゆる、よそ者である。よそ者が既存の社会に新風をもたらすことは、よく知られている。日本には、かつて中国や西欧から新しい文化が導入されたが、それをもたらしたのは渡来人だった。このような交流は、国と国の間だけでなく、かつては村と村、町と町の間でも行われていた。

いわゆるトリックスターというのは、それまでの秩序を破壊して新しい物語を展開するものである。その性格はさまざまであるが、乱暴者や愚か者として描かれることもあれば、価値のある変化をもたらす英雄となることもある。

宮沢賢治の『風の又三郎』では、転校生である高田三郎が不思議な能力を発揮することによって、子供たちに新鮮な感動を与える。逃げた馬を霧の中で見つけたり、とってはいけないタバコの葉をむしったり、川で魚とりをしたりするが、三郎のまわりには不穏な風が吹いていた。子供たちは「常識」が通じない三郎を疎外するが、やがて三郎は風のように去っていった。三郎はよい意味のトリックスターであったと言えるだろう。

有島武郎の『カインの末裔』では、北海道の原野に移住した仁右衛門と妻が小作人として成功しようと奮闘するが、凶暴な性格のうえに、賭博にのめりこみ、小作料も払わなかった。生まれた子供は赤痢にかかって死に、競馬に参加するも、馬が転倒し骨折してしまう。天候にも恵まれず収穫はなく、村人や地主からつまはじきにされた仁右衛門は、家に火をつけ、妻と二人で農場を去っていく。仁右衛門は、ただ乱暴なトリックスターとして描かれているが、パワーをもっていたので、環境が好転すれば成功したのかもしれない。

テレビの世界では、水戸黄門や木枯し紋次郎、漫画・アニメではムーミンのスナフキンや葬送のフリーレン、映画ではフーテンの寅さんや渡り鳥シリーズなど、実際の歴史上では迫害されてきたかもしれない異端者は、作品を魅力的にするうえでは欠かせないことが多い。

トリックスターというほどのことはないけれども、いかなる組織や企業でも、マンネリ化をうちやぶり新しい発展をめざすなら、考え方の異なる人間の意見や批判を受け入れて、旧来の考え方を更新することが必要である。その点で、大胆な個体はそれ自体、才能をもって

いると言えるかもしれない。

学生時代、大学の生協でお茶を飲んでいた時の話である。同じサークルの3人で円いテーブルに座っていたら、見知らぬ男がそのテーブルに座ってきた。私たちはとくに注意せずに話を続けていたら、その男は私たちの話に入ってきて、自分の意見を述べ出した。なんて大胆な男だと思っていたら、のちに動物学教室で同級生であることがわかった。彼はその後、京都大学の教授を経て、岡崎の基礎生物学研究所の所長になった。大胆なだけではそこまで成功しないので、大胆さと細心さ、そして知性を兼ね備えていたと言えるだろう。

## サイコパスの未来

あまりに大胆で攻撃的な個体は、害悪をもたらすことが危惧される。現代の人間社会では、かつてのように捕食者に襲われることはなくなり、喧嘩や乱闘によって相手を倒すことも、ほとんどなくなった。その結果、大胆で攻撃的な個体が傷ついたり死滅したりする確率は大幅に減ることになった。

未来の人間社会では、サイコパスは増え続けるのではないかと推測している。サイコパスとは関係しないかもしれないが、日本の学校において、いじめの件数は増え続けている。最新の統計では、小中高生の自殺者は過去最高の 532 人になり、その原因として学校におけるいじめや疎外が疑われている。いじめを行なった者には、よほどのことがないかぎり処罰は下されないが、いじめられた方は転校、不登校、自殺、ひきこもりなど、大きなダメージを被る。SNS では、ちょっとしたことで批判し、罵詈雑言を浴びせるものが増えている。家庭における DV (家庭内暴力) は 2026 年に過去最多になった。現代の最近おこっている戦争は、大国による小国への攻撃や侵略が多く、それを抑止するシステムはない。

生物の世界では、捕食者がいない場合、競争において強いものだけが生き残る。これにはもちろん例外もあり、環境のかく乱、生息場所の多様性、共生者や競争者の動態なども影響するのだが、人間には捕食者がいないために、競争の効果が出やすいと考えられる。

国際情勢についていえば、大国に対抗するためには、小中国が団結して対抗することが欠かせないが、アメリカ、中国、ロシアなどの戦力はずば抜けている。それでも、ロシアや中国があることによって、アメリカの野望は抑えられているとみなすこともできる。圧倒的に強い国が一つだけになると、他国は属国になって従うしか、とるべき方法はなくなるかもしれない。

国と国との関係は、国内の社会関係についてもあてはまる。小学校のクラスについても、大学の研究室においても、町内会においても、会社組織においても、さまざまな構成員が拮抗していることが、強者による横暴を抑えるうえで必要である。法律やルールは支配者の一存によって変えられやすいので、必ずしもあてにならない。

人間の性格は大なり小なり DNA の影響を受けている。大胆で攻撃的な人間の DNA についてはよくわからないが、かつてに推測すると、臆病で平和な個体の DNA よりも優位に立

って、多くの子孫に受け継がれるのではないかと考えられる。その理由は、大胆で攻撃的な人間の死滅率が低くなり、繁殖率が高くなるからである。その結果、人間はより大胆で攻撃的になると推測されるが、人間の行動を生態的にとらえる研究はいちじるしく遅れており、私の予想はあくまで根拠の乏しい推測にすぎない。

そうってしまった社会では、あまりに大胆で攻撃的な人間、あるいはサイコパスを、周りの人間が否定的に考え、嫌って抑制することが必要である。実際には、そういう人間はリーダーとして英雄視されることが多く、マスメディアでは、過激でおもしろいことを言うので歓迎されやすい。けれども、大胆で攻撃的な人間によって、集団が誤った方向に導かれたり、家族内や組織においては DV やハラスメントに悩まされたりする危険があることを認識し、十分に警戒することがますます必要になっている。

## 参考文献

- 片野修（1991）個性の生態学。京都大学学術出版会
- 片野修（1995）新動物生態学入門。中公新書
- 小出剛（2015）個性は遺伝子で決まるのか。ベレ出版
- 中野信子（2016）サイコパス。文春文庫